

東北アジア学術交流懇話会ニュースレター

うしとら

第39号

● 目次 ●

論点：資源輸出国家としてのロシアの明暗	1
東北アジア研究センター公開講演会・企画イベント トナカイとラクダが誘う知の旅	2-3
「ロシアにおける電磁波規制と関連技術」に関する講演会	4
センター研究会	5
シベリアだより	6
新任教員紹介	6
客員教授紹介	7
客員研究員紹介	7
会員の広場：ウズベキスタンとの交流について	8
編集後記	8



資源輸出国家としてのロシアの明暗

三菱商事株式会社社務部顧問
社団法人 ロシアNIS貿易会 ロシアNIS経済研究所所長

遠藤 寿一



米国発の金融危機が世界を駆け巡っているとき、ロシアは諸外国と異なり金融レバレッジが低いことで、影響はないと平然と構えていた。世界的な資源価格の高騰に裏付けされたロシア経済は磐石であると、政府幹部自らが豪語していたことから自信のほどが伺える。しかし、昨年9月15日のリーマンショック以降は、流動性危機・世界同時不況への懸念が加わり、金融業界は未知の世界に突入することになった。

2000年ロシア連邦の大統領に就任したプーチンは、ロシアの産業構造改革を提唱した。ロシアが先進国に仲間入りするためには、資源輸出国家から脱皮し、先端技術を基盤に据えた製造業中心の国家に改革すべきことを強く訴えた。ロシアは伝統的に、付加価値が低くなればなるほど国際競争力が高く、逆に高くなればなるほど国際競争力が低くなる構造になっていた。ソ連時代は社会主義諸国との交易が主体であったので、これでも満足されていたが、社会主義計画経済から資本主義市場経済に転換している現在では通用しない。

一方石油を初めとする資源の国際市場は、うなぎの

ぼりに上昇して、世界一の資源輸出国ロシアはわが世の春を謳歌することになって、面倒な産業構造改革に積極的に取組もうとする意欲を削いでしまった。

世界的資源価格の高騰に後押しされて、ロシア経済は世界第三位の外貨準備高を誇り、豊富な安定化基金を有し、財政は莫大な経常黒字に支えられてきた。昨年の国際原油市場はバレル当たり147ドル（7月11日）を記録したのがピークで、その後は下落傾向が強まり、年末の終値は40.02ドルになった。

2009年度ロシア連邦予算は、ウラル原油をバレル95ドルとして算定していたが、プーチン首相は1月19日の閣僚幹部会で、現実に即し41ドルに改訂し予算を修正するよう求めている。

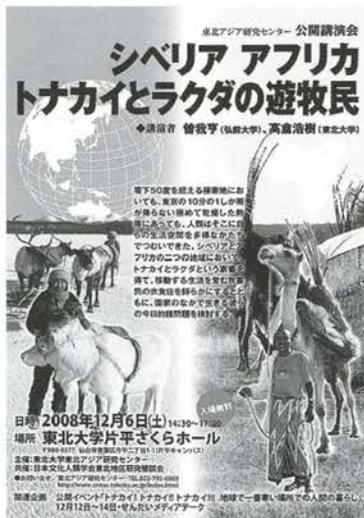
この機会に日本の産官学による協力も得てイノベーションに本気になって取組むことが出来れば、ロシアは資源輸出国家から脱出しステップアップすることができるが、これを逃せばロシア製造業の多くは国際競争に破れ、欧米企業の傘下に置かれることになるだろう。

トナカイとラクダが誘う知の旅

12月はセンター恒例の公開講演会の季節である。今年度は関連イベントとして写真&民具展も実施された。東北アジア研究センターの文化人類学グループが中心となったこれらの企画を通して、多くの仙台市民に、人類学の視点からのシベリア地域研究のおもしろさと可能性を伝えることとなった。

12月6日午後には東北大学片平キャンパスさくらホールで実施されたのは、講演会「シベリア アフリカ、トナカイとラクダの遊牧民」である。シベリアはロシアの一部でもあるが、その先住民文化は狩猟採集や遊牧などを通して環北極圏や内陸アジアとつながりをもっている。今回の講演会では、そうした文化史的な関連とともに、さらに異なる東アフリカの牧畜民との比較を試みた。アフリカとの組み合わせによって、これまでにないシベリア像を提示することができればと考えたのである。

当日は、弘前大学文学部准教授の曾我亨氏による「ラクダ牧畜民ガブラの生業文化と社会」、そしてセンター准教授の高倉浩樹による「トナカイ牧畜民エヴェンの生業文化と技術」の二つの講演がそれぞれ45分づつ行われ、休憩を挟んで、センター長かつ人類学者でもある



熱心に話を聞く公開講演会の参加者

瀬川昌久氏を交えた鼎談が30分という形で実施された。

地誌や民族・歴史的概況、寒冷地と乾燥地という全く異なる環境条件のなかで家畜に依存して生活を成り立たせるあり方、そしていづれも現在の国民国家世界にあっては民族的な少数者として「周辺」を生きる人々—これら三つの点に着目しながら、シベリアとアフリカの遊牧民それぞれの特徴が講じられた。社会主義を経験した遊牧民と、現在民族紛争によって難民化した遊牧民はその歴史・現状において大きく異なっている。とはいえ、家畜を基盤として成り立つ社会の基層文化には共通する多くの側面があるのも事実であった。

当日は講演会会場となりのホワイエ（廊下）部分に、パネルを立て、東北アジア研の紹介パネルおよびシベリアやアフリカの民俗写真の展示も行われた。風の冷たい土曜日だったにも関わらず90名近い来場者があり、従来にない賑わいとなった。おそらく、今回の講演会はアフリカを巻き込むことで、新しい市民の関心と呼んだのではないかと思われる。



公開講演会で鼎談する瀬川氏、曾我氏、高倉（左より）

* * *

講演会の実施から程なくして12月12日（金）から14日（日）には、仙台メディアテークの5階ギャラリーにて「<見る、さわれる、知の旅>トナカイ！トナカイ！！トナカイ！！ 地球で一番寒い場所での人間の暮らし」が行われた。この突拍子もないネーミング企画の正体は、シベリア先住民族の写真・民具の展示会であった。先の公開講演会と併せて、文化人類学の研究成果に基づいたシベリア先住民世界を、映像とモノを通して広く市民に理解してもらうことを意図するものであった。

折しも仙台名物のクリスマスイルミネーション「光のページェント」と重なり、またテレビ・新聞も巻き込んだ積極的な広報活動の効果があったのか、3日間で1045人という驚異的な来場者を記録した。

企画者の高倉が1994年以降の現地調査で収集してき

た民族標本（民具）および民俗写真を利用した、子どもから大人が楽しめる参加型の展示会というのが趣旨である。日本に暮らす者にとって遊牧という生活様式、家畜群という存在、さらに毛皮の民具はなじみが薄い。それゆえに、トナカイという動物の存在感や民具の素材感をさわってもらおうと思ったのである。

会場の入り口には縦3m横2mの巨大ポスターを貼り、中にはA0からA3サイズまでの写真97点、毛皮の民族衣装など37点、説明パネル6点を設置した。シベリアの森林を復元するために遠刈田温泉で伐採した木立を立て、模型の天幕や橇をおくとともに、実寸（に近い）トナカイパネルを20頭分近く立てて群れの雰囲気をも復元した。加えて調査地でフィールドワーカーが何を見て何を感じたのかメモ書きのような、つぶやきのようなものを約30の短冊に筆書きし木立に吊した。また、大学の研究室を復元することで、調査地と大学研究室との、いわば人類学者にとって通常実践している「旅」を、来場者に再体験してもらうことを考えた。来場者が、展示という異空間を積極的に体験しながら、展示対象となった人々に対して共感性を高めた上で、シベリア先住民の文化と現在について知識を得てもらうことねらったのである。

このような展示が可能だったのは、職業写真家であり、東北アジア研究センターリサーチフェローでもある斎藤秀一氏の協力があればこそだった。彼は写真制作の技術を担っただけでなく、漫画家で町おこしプロデューサーの千葉真弓氏、空間プロデューサーの千葉義人氏をこのイベントに巻き込んでくれた。こうした大学外のプロと、文学研究科の久保田亮助教、情報科学研究科の牧野友紀助教、院生の朝山慎一郎君と兼城糸絵さん、学部生の三浦達尋君と澤野正樹君、センターの徳田由佳子助手とでチームを作ることとなった。



異業種格闘というべきワークショップをくり返す中で展示内容・構成さらに広報戦略が練り上げられ、果てまたさらなる人的ネットワーク（手度組）が広がられていったのである。

研究成果を学生や異分野の研究者そして大学の外のプロや市民と共有することは激的にたのしい、というのが今回得た感想である。異業種間のセッションとでもいうべき濃い時間が半年に及ぶ展示準備の中でゆっくりと蓄積されていったとすれば、三日間の展示期間は、見知らぬ市民が次々に飛び込んで来て熱く語り合っている唐突な時間の反射であった。その媒体となったのは、民俗写真と民族標本といういわば生の研究資料がもつ力である。展示したのは、素材の力それ自体と、そして研究者がその素材と取っ組み合う研究のプロセスである。この二つが多くくの市民の喚起力をたきつけたことは間違いない。私自身がその形成に関わると同時に大きな影響を受けたのは、このような意味での研究と社会の新しい臨界のようなものだったのではないかと今は思っている。

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/labs/dse/takakura/tonapuro/index.htm>

文 @高倉浩樹
写真@斎藤秀一



会場内の復元天幕とソリ。バックは写真。



実寸大トナカイパネルと民具

● 講 演 会 特 集 ●

「ロシアにおける電磁波規制と関連技術」に関する講演会

佐藤 源之

電磁波は携帯電話やテレビ放送など我々の生活に無くてはならない存在です。一方、パソコン、テレビ、電子レンジだけでなく、自動車のエンジンなど電気・電子工学技術を利用するあらゆる機器は電磁波を放射しています。電子機器から放射される電磁波が他の電子機器に対して予期せぬ影響を与えることが危惧されます。このような問題を解決するのが環境電磁工学(Electromagnetic Compatibility: EMC)です。また電磁波が生体に影響を与えることの評価もこうした研究の一部です。日本のEMC研究の中心となっている電子情報通信学会EMCJ研究会は昭和52年(1977年)に東北大学研究グループが中核となり設立され、東北大学におけるEMCの研究の歴史も「EMC仙台ゼミナール」を中心に30年がたちました。日本におけるEMC研究は今日の我が国における電子通信機器産業の発展に大きな役割を果たしてきましたが、EMCの国際的な研究では旧ソビエトの電波ばく露基準が、欧米や日本における基準に比べ大変厳しかったことが良く知られています。しかし1990年代以前、旧ソビエトの研究者との交流は少なく、またソビエトの規則がどのように作られてきたかなどを知ることはできませんでした。そこでロシアから電磁波の人体への影響などについて長く研究に携わってきたロシア人研究者を招聘し3回の連続した研究会を東北アジア研究センターが開催いたしました。
<http://cobalt.cneas.tohoku.ac.jp/users/sato/EMC-ISTC.htm>

- 10月22日(水) 東北大学 東京分室 参加者46名
- 主催 ISTC 協賛 東北大学 東北アジア研究センター
- 「第45回ロシア先端科学技術に関する ISTC Japan Workshop : ロシアにおける電磁波規制と関連技術」

ロシアの電波ばく露基準に関する技術的解説していただくと共に、現在のロシアにおける環境電磁工学技術の紹介、研究活動、企業化などの現状を紹介していただきました。主催者ISTC (http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaikou/technology/istc_1.html) は旧ソ連の研究者と日米欧の研究者、企業との共同研究を推進しています。今回も企業からの多くの参加者があり共同研究などへ結びつけるための情報交換を行いました。

- Valentina Nikitina (St.Petersburg State Marine Technical University)
Electromagnetic fields on board ships. Assessment of danger for the crew, hygienic regulation, Russian experience in protection from EMF”.
- Nikolay Khokhlov (Limited Liability Company NANODIAGNOSTIKA)
Quasistatic electromagnetic tomography methods and its applications developed in the Institute for Radioengineering and Electronics(Moscow, Russia)
- Nina Rubtsova (Research Institute of Occupational Health of Russian Academy of Medical Sciences)
EMF Hygienic standardization in the Russian Federation and prospects of its harmonization with international
- Alexander Worshevsky (ELEMCOM)
EMC Standardization and activities in Russia
- Nikolay Chubinsky (Moscow Institute of Physics and Technology)
The electromagnetic field probe for registration of ultra wideband pulses

- 10月24日(金) 米沢(山形大学)
環境電磁工学研究会(EMCJ)・マイクロ波研究会(MW)
- 共催 電子情報通信学会 マイクロ波研究会, 環境電磁工学研究会(EMCJ)、IEEEEMCS 仙台チャプタ

本研究会では招聘ロシア研究者に招待講演をお願いし、大学等の研究者との交流を深めました。

- 10月25日(土) 仙台国際センター 参加者28名
- 共催 東北大学東北アジア研究センター、ISTC、仙台EMC研究センター推進部会
- 「ロシア・旧ソビエトにおける電波ばく露基準とロシアにおける環境電磁工学技術」

本講演会では旧ソビエトと現在のロシアにおける電波ばく露基準に関する技術的、歴史的背景を解説していただくと共に、日本での考え方についても紹介をいただきました。本講演会では仙台EMC研究センター推進部会やEMC仙台ゼミナールの協力をいただき、仙台を中心にEMC研究に関わる企業、大学からの研究者にお集まりいただきました。

開会挨拶
 東北大学名誉教授 佐藤利三郎

- 首都大学東京大学院 多氣 昌生 教授
電磁界曝露に関する日本の防護指針とICNIRPガイドライン
Japanese guidelines on human exposure to EMF and ICNIRP guidelines
- Valentina Nikitina (St.Petersburg State Marine Technical University)
Experimental bioeffects of chronic radiofrequency EMF
- Nikolay Khokhlov (Limited Liability Company NANODIAGNOSTIKA)
Quasistatic electromagnetic tomography methods and its applications
developed in the Institute for Radioengineering and Electronics (Moscow, Russia)
- Nina Rubtsova (Research Institute of Occupational Health of Russian Academy of Medical Sciences)
Power frequency electromagnetic fields: biological effects, hygienic standardization, methods of control and protection. Experience of Russia
- Alexander Worshevsky (ELEMCOM)
EMC standardization in Russia
- Nikolay Chubinsky (Moscow Institute of Physics and Technology)
The shaper of high-voltage ultra wideband pulses for an exposition of cellular tissues



東京 講演会風景

センター研究会

● 「比較移民研究会」 第2回研究会

移民の学際的な比較研究を目指す本ユニットでは、2008年12月20、21日の両日にわたって比較移民研究会を開催し、前回同様に学内・学外あわせて30名近くの研究者が参加した。「移民の自助組織—過去と現在」という今回のテーマにそって行われた研究発表は、浅川晃広（名古屋大学講師）「在日中国朝鮮族の実態と意識」、木曾恵子（京都大学大学院・博士課程）「東北タイ農村における女性の出稼ぎ実践の変遷—グローバル化時代の女性労働の動態」、園田節子（神戸女子大学准教授）「移動社会の形成・管理・情報伝達—19世紀後半の南北アメリカ華民コミュニティを例に」の3本である。いずれも知的な刺激に満ち、各発表後や懇親会の席においても談論風発、参加者全員を巻き込んだ実のある討議を行うことができ、

終了後には各自、新たな問題意識と課題を持ち帰ることができた。

（李仁子・瀬川昌久）



● 東北アジア研究センター研究紹介発表会

2008年9月29日（月）10:00～16:45、川北合同研究棟大会議室において開催された。研究紹介発表会は、センターの研究者の個人研究について紹介する目的で毎月1名ずつ行われているが、1年間で紹介できる人数に限りがあるために、今回初めての試みとして1日をかけて発表することになった。今回の発表会では次の11の研究紹介の報告が発表時間20分と質疑応答10分で行われた。発表題名と紹介者は以下の通りである。（鹿野秀一）

- ・アジア商人の商業ネットワーク（塩谷昌史）
- ・シベリアのポテンシャル～ロシア科学アカデミーシベリア支部を中心に（徳田由佳子）
- ・湿地生態系の安定同位体比による食物網の研究（菊地永祐）
- ・分子系統解析による微生物群集構造（鹿野秀一）
- ・白頭山、10世紀巨大噴火以降の噴火史の再検討（宮本 毅）
- ・ノア画像から中国越境大気汚染の抽出（工藤純一）
- ・清代モンゴルの社会構造と清朝統治の性格に関する再検討（岡 洋樹）
- ・「言語接触」の観点から見た「言語変化」について（柳田賢二）
- ・日本と中国の真作・模倣観—古書画の世界—（磯部 彰）
- ・1930年代後半ソ連極東の鉄道政策（寺山恭輔）
- ・牧畜から狩猟への生業転換とエスニシティ：ヤクーチア北西部の環境と開発（高倉浩樹）

● 東北アジア研究センター第1回学生研究交流会を開催

本センターでは、文系・理系の様々な分野の学生が東北アジア地域に関連する研究活動を行っている。従来、本センターでは定期的に教員の研究発表会を行ってきたが、学生はセンターの所属研究室と所属学部の関連研究室とを往復しながら研究を進めていて、センターの他の研究室の学生がどんな人で、どんな研究をしているのか知る機会がなかった。そこで、センター内の「風通し」をよくし、毎日玄関や廊下で会う学生・教員が互いに言葉を交わす雰囲気づくりを目指して、研究推進委員会（佐藤源之委員長）がこの交流会を行うことを提案し、センター教員全体の賛成を得て、2008年10月20日に実施した。まず、14時から川

北内キャンパスA-101講義室で口頭発表12件（各15分間、計3時間）を行い、17:30頃からセンターの436会議室でポスターセッション（20件）、そして18:30頃から同室で懇親会を行った。センターには学部4年、修士、博士、ポスドク合わせて67名の学生がいるが、その約半数（33人、外国人留学生5人を含む）が発表し、教員を含めて記名した参加者は54名であった（実数はもっと多かった。会場でプログラム・要旨集を配布）。「中国中世の鬼神観」、「漢族の婚姻儀礼」、「清末内モンゴルの墾務局」から「水田季節変化モニタリング」、「公共施設最適配置」、「オオクチバス当歳魚の餌資源」、「伊豆大島溶岩流の表面形態」まで、様々な興味深い話を聞くことができ、交流の輪が広がった。

（学生研究交流会担当：石渡 明）

シベリア便り

昨年、ロシア科学アカデミーシベリア支部細胞・遺伝学研究所と核物理研究所が共同で、ある薬を開発しました。血栓を溶かす薬《トロンボヴァジム》です。ロシア連邦統計局が1992年から2007年までの人口の死亡原因をまとめたデータで見ても、血液循環系疾患による死亡率は癌による死亡率をどの時代も上回っています。タバコが原因と思われる呼吸器系やアルコールなどが原因と思われる消化器系の疾患もありますが、高血圧、心筋梗塞、動脈硬化、脳梗塞などとは比較にならない程度ようです。ロシアの気候は厳しいもので、我々と比べてタダでも不利な環境に感じられますが、彼らはメタボリックへの道をひた走るような食生活をし、更には推奨している面さえあるのですからデータのような結果が出てしまうのは仕方のないことにも思えます。最近、若い世代はスリムな体型を維持しようと甘いものや油ものを控える傾向にあるようですが、もちろん「シベリアの厳しい気候を乗り切るためには脂肪をつけなきゃダメ！」という従来の考えの人も少なくありません。別に室外に住んでいるわけでもなく、集中暖房が完備されている室内では半袖で過ごせるくらい暖かいわけで、まして多くの人々は倒れたり病気になった後には医者から油、糖分、塩分、酷い場合には蛋白質の摂取まで制限されてしま

うのですから、そこに至るまで身体に脂肪を蓄える必要性は正直感じられません。恐らくこの考えが根強いのは、健康には良くないと薄々感じつつ、彼ら風の食の楽しみ方を正当化するためなのでしょう。

そんな人たちにとって正に救世主的な薬が開発されたのです。これさえ飲んでいれば、最も恐ろしいと言ってもいい血液循環系疾患の予防になるのです。開発当初、また生産が開始されてからロシアのメディアはこぞってこの薬に関して報道したようです。どの程度の効果があるのか私自身は確認しておりませんが、シベリア支部でも代表的な2つの研究所による共同開発です。自信作に違いありません。どなたか《トロンボヴァジム》をお試しになりませんか？

(徳田由佳子)



ロシア科学アカデミーシベリア支部核物理研究所

◆ 新任教員紹介 ◆

平野 直人 助教

2008年12月に地球化学研究分野の助教に着任しました平野直人です。山形大学を卒業後、筑波大学大学院を修了し、その後は東工大、カリフォルニア大、東大、金沢大と、様々な大学をポストドクとして渡り歩き、この度ようやく東北アジア研究センターへたどり着きました。毎年のように引っ越しをしたことはとても大変で面倒でしたが、素晴らしい経験がありました。それは、様々な分野の研究者とふれ合い、学び合えたことです。そして、自分の研究分野枠にとらわれず学際的な研究を行っていくことの重要性を強く感じました。東北アジア研究センターは、そうした学際的な研究活動が行える場所です。僕がこれから分野が異なる研究者の皆さんから多くを学び、議論することでどんな新しい研究のアイデアが生まれるのだろうか？と考え、今からワクワクしています。

これまで僕は、三陸沖の太平洋プレートで活動する海底火山を研究し、それが今まで地球上で知られていた火山発生メカニズムのどれにも当てはまらない新種の火山であることを突きとめました。そして現在、調査海域をトンガ沖

や日本海、南米チリ沖など、世界の深海底に広がっています。またそのような火山は西南日本や北海道、台湾、極東ロシアなどの陸域にも存在していることもだんだん分かってきました。これらの地域の調査を進める予定です。

仙台での生活は僕にとって山形で生活した大学生時代から数えて十数年ぶりの東北生活でもあります。まだ新生活に慣れていませんが、冬の寒さや雪道の運転など、だんだん大学当時(大昔)の生活を思い出し、楽しくなってきました。趣味はテニス、旅行、古代史、そして食べることです。仙台でおいしいもの、おいしいお店があれば是非教えてください。



◆ 客員教授紹介 ◆

ブラック ジョン アンドリュー 教授

2008年11月1日より、2009年3月31日まで、オーストラリアシドニー大学のブラック教授が、客員教授として滞在されています。

先生は、交通工学および交通計画の分野の世界的な研究活動をリードし、世界交通学会（World Conference on Transport Research Society）の常務理事のほか、アジア交通学会、太平洋海洋科学技術会議（PACON）などの国際学会の学術委員、Environment and Planningなどの国際学術雑誌の編集委員を務めておられます。また、交通計画コンサルタントの実務経験もあり、アジア諸国の大学への短期滞在を活用して、各国の実証的な研究、学生指導、および北京オリンピックの交通処理計画をはじめとする実務へのアドバイスなどの実績が豊かです。わが東北アジア研究センターにおいても、1999年に客員教授として在籍され、宮本和明教授との共同研究のほか大学院工学研究科の学生指導にも当たっていただきました。

先生の最近の関心は、公共交通を軸とした都市の再編方法や、気候変動問題に対する都市の対応策と回避策です。日本はアジアの諸国の中でも最も早く少子高齢化を迎え、また気候変動問題への技術的な対応能力も高い国です。今後東北ア

ジア諸国での都市の政策を考えていく上では、社会的な問題解決策を日本が積極的に開発し、提案していく必要があります。

先生は本センターの滞在中に、今後の共同研究の方向性を踏まえて、アジア諸国の気候変動と都市政策上の対応に関するデータ収集、日本の都市政策のヒアリング調査などの研究活動を進めておられます。また、2009年3月下旬には、公共交通指向型都市開発（TOD）のセミナーを、学内で開催する予定です。

先生は1999年の滞在以来、芭蕉に特に関心を持ち、その後日本語の習得も進めておられます。休日には、松島や山寺などの「奥の細道」を歩きながら、俳諧の心を感じ、さらに墨絵にも挑戦されておられます。今回の客員教授の期間を超え、引き続き研究協力関係が構築できるものと期待しています。

（奥村 誠）



ステムラー フロリアン 准教授

フィンランド国ロヴァニエミ市にあるラップランド大学北極センターから来ました。東北アジア研究センター客員准教授として、2009年1月から7月までの約半年間仙台に滞在することになります。専門は社会人類学、とくに北方人類学です。ロシア北極圏に暮らすトナカイ遊牧民・狩猟漁労民さらに資源開発労働者のあいだでフィールドワークを行ってきました。最も主要な調査地は、西シベリアのヤマロネツ人およびヨーロッパロシア北部のネネツ人です。調査の経験から、人間の移動や居住、遊牧、人—動物関係、さらに産業開発や技術変化が社会と文化に及ぼす影響を与えるかといった理論的関心を持つようになりました。ソ連崩壊後のシベリアのトナカイ遊牧先住民の多くは経済混乱のなかでトナカイ飼育

業は崩壊しました。しかし、私の調査するネネツ人はそうではありませんでした。この理由の一つは彼らが蓄積してきた家畜との関係にあると考えています。日本滞在中にはこの人—家畜関係に関わる比較民族誌的研究を進めるつもりです。この研究領域にかかわる日本の人類学者や関連する専門家と積極的な交流をしたいと思っています。



ネネツ人の民族衣装マリツァを着てフィールドワーク中の著者

◆ 客員研究員紹介 ◆

ステムラー=ゴスマン アンナさん

フィンランドのラップランド大学北極センターから来ました。専門は北方人類学。とくに北部ノルウェーからヨーロッパロシア北部そしてカムチャッカ半島までのユーラシア北極圏が調査地域です。現在取り組んでいるのは、2つのテーマです。一つは気候変動が人の社会文化に与える影響についての人類学です。洪水や土壌浸食の被害にある極北地域のコミュニティの脆弱性と適応について研究しています。この課題は、国際極年委員会のプロジェクトでもあります。もう一つのテーマは、グローバリゼーションと国境貿易に関わる人類学的研究です。特にフィンランドとロシ

アの国境間でのいわゆる「担ぎ屋」に焦点をあて、その商活動や彼らが当該社会にもたらす社会文化的影響を調査しています。日本にいる間には、日本とロシアの間の中古車貿易なども人類学的観点から調査したいと考えています。2009年7月までの半年間東北アジア研究センターの客員研究員として滞在します。



グリーンランドの水河をバックにして (2008/8)

アジア学術交流懇話会

会員の広場

お互い お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです（不定期）。
 今回は、建設省勤務時代には“科学万博—つくば’85”の設計に携われ、その後建築プラント関係企業での勤務時並びにその退職後も、内外の建築物に深い興味を抱かれ何度となく海外に出かけられている門馬康夫氏に寄稿戴きました。特にウズベキスタンでの滞在経験が深く、ご専門の建築関係のみならず中央アジア諸国の歴史、考古学、文化論まで幅広い興味を持たれ、目下放送大学でさらに知識を広めておられます。

ウズベキスタンとの交流について

福島県ウズベキスタン文化経済交流協会 会員

門間 康夫



ウズベキスタン共和国といいますと、シルクロードの国として有名であり異国情緒豊かなイスラーム建築群、砂色の町並みとか月光に照らされてのラクダ商隊などのイメージが強いのではないのでしょうか。私は、仕事や個人的な関心事で通算50日間ほどの滞在経験がありますが、ここではあまり知られていない一面をご紹介します。



写真1. ウズベキスタンと周辺の地図

ウズベキスタンは、中央アジア諸国5カ国の真中に位置しており（写真1）、残りの4カ国、カザフスタン・キルギスタン・タジキスタン・トルクメニスタンすべてと国境を接している唯一の国です。しかも、カスピ海などは別として、いわゆる海には2カ国以上の国を通らないと出られず、同様な国はリヒテンシュタイン公国のみだそうです。そんなお話をお聞きしながら、タシケントに当時の中山恭子大使を訪問した時（写真2）に鮫と日本酒を戴いた時の味は格別のものでした。



写真2. 大使館（タシケント）に中山恭子大使を訪問（2001年）

第2次世界大戦の直後、日本兵が捕虜になってソ連各地で強制労働を強いられました。極東シベリアでの日本墓地については良く報道されていますが、ウズベキスタンにも約2万人以上が抑留され、建設工事など過酷な労働を強いられ800人余りの人たちが命を落としました。私は、満洲で終戦となりウズベキスタンに抑留された伯

父の墓参りをするために、福島県ウズベキスタン文化経済交流協会の一員として訪れました（写真3）。伯父の名の墓は見つかりませんでした。無名の墓も現地の皆様が作り守って居て下さいました。



写真3. ウズベキスタンの元日本兵の墓地（2005年）／中山大使のご尽力で整備された

ウズベキスタンは1960年代中頃、二回の大地震を体験しました。被害はタシケント中を襲い建物の殆んどが崩壊したが、ナボイ劇場（写真4）だけはビクともしませんでした。この事実は現地人をして「“やっぱり”日本人はすごい！」と言わせしめました。と言いますのは、満洲から送り込まれた日本の航空技術兵抑留者がこの劇場の建設工事に当たったため、設計図も読めるし器用だし、しかもソ連人とか現地人が不思議がるほど勤勉だったので、建設当時から「日本人はすごい！」と言われていたためです。



写真4. 抑留日本兵の建てたナボイオペラハウスを背景に通訳と（2005年）／1966年の大地震でこれだけが崩壊しなかった



今回は、日本も大きく関係するロシアの資源問題を遠藤寿一氏から、旧ソ連邦当時に日本兵が強制労働を強いられたウズベキスタンとの交流を門間康夫氏からご寄稿頂きました。ご多忙の中のご執筆ありがとうございます。これからの日本にとって有意義なご助言と存じます。これからも宜しくお願いします。（工藤純一）

《うしとら》（東北アジア学術交流懇話会ニューズレター）第39号 2009年3月15日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41番地 東北大学東北アジア研究センター 気付

PHONE 022-795-7580 FAX 022-795-6010

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/ E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp